

エコエコアザラク

眼

Night 09

眼球譚

第二稿

脚本／小中千昭

Teleplay by Chiaki J. Konaka

2003\12\04

登場人物

黒井 ミサ

山中 博美

伊澤 亮子

リンダ

リリー

萩原 文哉……………ジャーナリスト

岸田 嘉彦

漆畑 樹……………賀茂の女性秘書

岸田 雄彦……………岸田の父／与党幹事長秘書

四方田千砂の母

マゾヒストの女

サディストの男

証言者1 (若い女)

証言者2 (若い男)

証言者3 (主婦)

小学生低学年の女の子「亮子の少女時代」

○白昼夢——イメージ

ざらついた感触の映像。
アスファルトの上に、異物が転がる。
人の、眼球。それが街の中に転がっている。
あたかもそれは、人の躰から摘出されたばかりの様に
てらてらとぬめっている。

○インタヴュー画面

時折挟まれるこのVTR映像は、『スクープアイ』
ENG取材映像。インタヴューは画面内に在らず。
証言者1（若い女）「元々、靈感とかそういうの、無かった方な
んですけど——、多分ここ一年くらいの間だと思っ
すけど——、見える様になったんですね。ふっと気が
つくと、暗い影の中に、なんか黒いものがあるって
か——」

▼フラッシュイメージ／ラルヴァ

証言者1「あれって——、絶対生きてる人じゃないんだって
感じがするっていうか——」

○マンション外観

グランメゾン・リバーバンクマンションが、鉛色の
空に禍々しい姿で屹立している。その中の一室——

○博美の部屋

ベッドとドレッサーがあるだけで、空疎な部屋。
多くの洋服が無造作にハンガーに掛けられている。
博美は窓際に立って携帯で喋っている。

博美「——え？ ごめんなさい、ここ電波悪くて——。え？
放送では流せない？ どうして？——そんなの構わない。
数字が獲りたいんでしょ？ 別に死体を写す訳じゃない

んだから。——入りはじゃあ夕方でもいいのね？ 了解」

博美、携帯を切り、室内を見回す。

博美「——（眩き）何で、新しいのに通じない……？」

壁際に来る博美。と、コーナーの壁紙が少し綻んでいるところがあるのに気づく。

博美「——」

博美、壁紙に指をかけ——、少しづつ剝がしていく。

博美「——（眉を顰める）」

壁紙の内側は、鈍色の金属だった。

岸田の声「鉛だよ」

ハッと振り向く博美。

岸田「このマンションの壁は鉛で覆われてるんだ——
招かれざる岸田の存在と、そして岸田が告げた事が

博美の顔を憎しみに歪める。

○赤い部屋

ソファにじっと座っているリリー——、床に向かい合って座っている二人を見つめている。

床では、ミサとリンダ。眼を閉じ、じっとしているミサに化粧を施しているリンダ。

右目周りに、黒い色をブラシで塗り込んでいく。

ミサ「——ねえ……」

リンダ「——だめ。じっとしてて」

ミサ「……」

再び眼を閉じるミサ。

リンダは、人に化粧をするのが楽しいらしい。
真剣ながらも、少し笑みを浮べている。

リンダ「——（眩き）いい感じ……」

やや間あって——

ミサ「（眼を閉じたまま）男の人を苛めるのって、楽しい？」
リンダ「——楽しいよ……」

ミサ「——まだ、ラルヴァの黒い影、見える？」

リンダ「——」

ミサ「あなたの眼は、見えてはならないものの姿を捉えているの？ だから、あなたは人を苛める遊びが好きなの？」

リンダ「喋らないで……」

ミサ「——」

○白昼夢

早朝、無人の交差点——。

その真ん中に転がる、眼球——。

○オフィスビル／エレベータ内

三十台のスーツ姿の男、乗り込んでくる。

室内には、書類袋を脇に抱えたOLが一人いるだけだった。女は男を無視している。

男はつまらなそうに天井を見上げる。

す、っという衣擦れの音に、男は女に視線を向ける。

女は腕を上げ、髪を整えていた。

その髪ではなく、男の視線はある一点に注がれる。

裾から伸びた女の細い手首。そこには、赤黒い輪状の痣がくつきりとついていた。

通過階を示すランプが一階に近づいている事を報す。

男は平静な顔でいるが、その内心には欲望の炎が点火されている。

女は、男の事を、背中で意識している——。

○台場（過去回バンク映像）

海獣の咆哮の様な遠鳴り。

レインボーブリッジを背に、巨大なるゴシックの門の幻が、海霧の中にぼうっと浮かび上がる。

○賀茂設計事務所

精緻に作られた、湾岸新都心のミニアチュア。
見慣れた湾岸地帯の建物の中に、真新しい白く抽象
化された巨大門がホログラフィ※で像を結んでいる。
そのミニチュアを、ロウ・アングルで一眼レフのフ
ァインダー越しに覗いている男——萩原。
と、部屋へ入って来る若い女性秘書・漆畑樹。

※ミニチュアでも可

樹 「お待たせしており申し訳ありません」

萩原 「いえ。こちらこそ急にお伺いして」

樹 「賀茂は未だ出先から戻りません。後日アポイントをとつて頂いてから再度——」

萩原 「もう少し、待たせて頂いて貰っていいですかね。もし、ご迷惑じゃなかったら——」

樹 「——（無表情）」

萩原 「（門のミチアチュアを示し）すごいですね、これ。賀茂さんが中心になって進めている東京リヴァース計画の顔と言いますか——。」

樹 「——」

萩原 「ちょっと聞いたんですけど、これの建設現場、なんかとてつもなく深く基礎工事されてるって。それってやっぱり、地震対策とかなんかなんですかね」

樹 「わたくしにはお答え出来かねます。ではお待ち下さい」
一礼し、出て行く樹。

萩原、嘆息し、窓外を見る。

ミニアチュアの風景がそのまま、窓外に広がる——

○インタヴュー画面

証言者2（若い男） 「何ていうか時々、頭の奥の方がジーンとなる時があって、そんな時になると、ふっとそこら歩いている人の後ろに、影みたいのが浮かんでるのが見えるんですよ、普通に」

○岸田の部屋

照明の色合いが違うだけで、間取りは博美の部屋と同じ。寝乱れたベッド、イーゼルと、それに架けられたキャンバス。

大型のJBLのスピーカーに、McIntoshのアンプ。そこに入ってくる博美——。部屋を見回し

博美「——同んなじ間取りなんだ……」

続いて入ってきた岸田、キッチンに入る。

岸田「賀茂っていう有名な建築家の設計にしては手抜きだよな」
岸田、冷蔵庫から牛乳のパックを出し、皿に入れる。臭気に鼻を小さく鳴らし、部屋を見回す博美。

目に入る、部屋の隅に置かれた黒いビニールに包まれた、何か。

岸田、キッチンから出てきて、黒いビニールの前にミルクの入った皿を置く。

どこにいたのか、猫が現れ皿の周囲を歩き回りだす。

岸田「——これが気になる？」

博美「——」

岸田「——あなたが考えているものだよ、これは」

見つめ合う二人——。

猫はミルクに砂をかける仕種をしている。

博美「あたしをそういう眼で見ない方がいいって、忠告したわよね」

岸田「僕もこの臭い汚物（黒いビニール塊）になっちゃおう？」

博美「——」

岸田「僕は、あなたの持っている眼に惹かれるんだ……」

○白昼夢

ビルとビルの谷間の暗い路地——。

そこに転がる、眼球。

岸田「（オフ）その暗い力を秘めた眼球こそ、僕を退屈なこの世界から引き上げてくれる……」

○岸田の部屋

博美は無表情に岸田を見つめている。

岸田「——（黒い塊を示し）こいつも、そういう眼を持っていないんだ。でも、つまらない事に首を突っ込み過ぎた」

博美「——簡単に人を殺すのね」

岸田「——あなたも、そうしてきたんでしょ？」

博美「——」

博美、黒い塊の前に歩みだす。

岸田「——」

博美、黒い塊の前に置かれた、ミルク皿を持ち上げて——、それをおもむろに黒い塊に注がせる。

黒いビニルの表面を、白濁した液体が流れていく。

その流れを見つめている博美の眼、上気している。

深く呼吸をし、胸が大きく動く。

それを見つめている岸田——。

博美「——あたしは、選ばれた人間なの……。あたしが邪魔だ、

お前なんか死んじゃえ、って願ったら、人は簡単に死ん

でしまう。あたしが、そんな力を持って生まれたのには

理由がある筈……。そう思わない？」

岸田「（喉がカラカラに乾いている）お、思うよ……」

博美、岸田の方に向き、強い視線で見つめる。

博美「あたしの眼の力は、こんな汚らしくて臭いものとは違う」

岸田「（やや怯え）そうだよ。それ事くらい、僕にだって判る」

博美、ぐっ、と強い視線の眼を岸田に近づける。

岸田「——もっと、僕を見て——」

博美、岸田の髪をぐっと両手で掴み——

自分の唇に引き寄せ、激しく唇を吸う。

岸田は両腕で強く博美を抱く。

○赤い部屋

そっと筆をミサの唇から離すリンダ——。

化粧の終わった顔に、思わずじっと見入ってしまう。
ミサ「——どう？」

リンダ、手鏡を脇からとり上げ、ミサに向ける。
鏡に映る、ゴスなメイクが施されたミサ。

ミサ「——これが、あたしの顔——」

リンダ「なんだよ、似合うじゃん。ちっ。もっと外してくれると期待してたのに」

ドアが開き、入ってくる亮子。

亮子「！——（微笑）何しているの？ 仲良く二人で」

リンダ「（ムッ）別に仲良くなんてしてないもの。ただこの子があんまりこの部屋に不似合いだから、せめてお化粧くらいすればって言って、そしたら……」

リンダ、わざとらしく時計を見て——

リンダ「あっ、あたし予約入ってたんだ。ちと早いけど、もう行ってこよっかな」

○インタヴュー画面

証言者3（主婦）「あたしの近所でも、なんか見えるんだ、とかいう奥さんがいて——」。

これも噂で聞いたんですけど、そういう変なものが見える人って、見るだけで人を、その——呪うっていうか、そういう力があるって——（苦笑）」

○地下道

ひと気ない連絡地下道に足音が響く。

歩いているのは、書類袋を抱えたOLの女と——、それを追うスーツ姿の男。

と、急に立ち止まる女。

男、間隔を空けたまま、立ち止まる。

女 「（振り向き）——あの——、何か御用でしょうか」
男 「——お気づきだったんでしょう？」

女 「――」

男 「あなたが求めているものと、僕が求めているものが、互いに引き合っているんです」

女、じっと男を見つめている。

その瞳――、僅かに狂気の色を帯びて――

○赤い部屋

ゴスなメイクを施されたミサ、床にぺたりと座ったまま、亮子の方を見ている。

亮子 「――ミサちゃん――、綺麗だわ……」

ミサ 「――ママ――、前に、話してくれた事――」

亮子 「――」

ミサ 「ママが子どもの頃に聞いた、この街を彷徨う女の子の魔女のお話――」

亮子 「――本当はね……、噂話なんかじゃないの――」

ミサ 「――」

亮子 「私が少女の時に、本当に出会ったのよ――、黒井ミサっていう魔女と――」

ミサ 「(小さく驚く)――」

○地下道

今そこに響いているのは、足音ではなく激しい吐息と衣擦れ。

そこが密室ではない事が二人を昂奮させている。

男と女は、衣服の上から互いの躰をまさぐり合い、唇を吸い合う。

亮子 「(オフ/インサート) 私はただ抑圧するだけが教育だと思っている家で、ずっと息を殺して育っていた。私は、自分の中にどんな欲望が潜んでいるのか知るのが恐ろしかった――」

欲望をぶつけ合う二人の男女を、ずっと離れた階段の下で立ちすくみ、見つめている小学生の少女。昔

風の格好をしている。それは、過去の亮子、かもしれない。

○赤い部屋

亮子「——私は、私を生んだ家と、その家族を呪っていたの。

そう。あのリンダちゃんと同じ……」

たおやかな笑顔で静かに語る亮子。

ミサ「……」

亮子「図書館で見つけた、古代エジプトの呪文——。それを唱える私の声が、きっと聞こえたんだわ……」

ミサ「黒井、ミサが、ママのところへ来たの……」

亮子「——彼女は本当に魔女だった……。そして私の呪文が間違っているって、教えてくれたの」

やや間あって——

ミサ「魔術は、成功したのね……」

亮子「——私は抑圧から開放された。けど、違う抑圧——、幼くて親がいない子どもが受けるべき運命を味わった——。それでも私はあの時に私を導いてくれた、お姉さん……。私はそう呼んでいた、あの人にはずっと感謝してきたの」

ミサ「——」

亮子「——私は魔女になりたいって思いながら、大人になった。沢山本も読んだし、アメリカに渡って魔女になろうとしているカヴァンに参加したりもした。でも、本当の魔女になんかなれっこなかったの……」

ミサ「——亮子さんが出会った、黒井ミサって——、どんな子だったの……」

亮子「——あなたとは、全然違う顔だったわ……」

ミサ「——（衝撃）」

亮子「喋り方は似ている。でも、あの人はあなたの様な優しさも無かった……」

ミサ「——（眼を落とす）」

亮子「——もしあなたが、あの時のお姉さんだったら——、きっとそうなんだと思いたい……。でも……」

ミサ、混乱した顔で立ち上がる。

亮子「——何か、何かがあったのよ。だからあなたは——」

ミサ、赤い部屋から逃げ出す。

亮子「——ミサ、ちゃん……」

○白昼夢

今は無人となっている、地下道。

そこに転がる、眼球。

○街

ミサは走る。

何処へ向かうというでなく、走るという行為に駆り立てられている。

○岸田の部屋

黒い塊を枕にし、横たわって抱き合う博美と岸田。衣服が濡れるのも構わず——。

○『スクープアイ』画面

ブルーバックだけという簡素なセット。

カメラに向かう博美。スクエアなスーツ姿。

博美「東京で増加している、異常視覚者と呼ぶべき症状を訴える人たちは、一体何を見ているのでしょうか。彼らが言う通り、死後の世界から彷徨い出た影を見ているのでしょうか——」

博美の片手は、テーブルの上で何かを握っている。

○岸田の部屋

黒い塊の上の二人——。

岸田「あなたは僕の女神だ……」

博美「——（微笑）」

岸田「あの子以来の——」

博美の笑顔、凍る。

博美「——誰の事」

岸田「——四方田千砂っていう子が、いたんだ」

博美「——」

岸田「でも、あなたの方がずっと強いよ……。だから僕はあの子も、僕の手で汚れた肉にしてやった」

と、博美、躰を起こし、四つ這いになって岸田の顔に近づき囁く。

博美「——ねえ、あたしはこの中（黒い塊）の眼が欲しい」

岸田「え……？」

博美「取り出してよ。この中の、眼を」

岸田「——」

岸田は、自分が凭れる黒いビニールの塊を見つめる。

○街

彷徨うミサ。

ミサ「（モノ）あたしは誰なの……？ あたしは黒井ミサじゃないの……？ でも、あたしはあの人と逢った事なんて覚えていない。魔術で人を殺す事を手伝った事なんて、覚えてない！ じゃあ、でもじゃああたしは誰なの……」

と、それまで昼間だった空が突如漆黒の闇に。

ミサ「!?」

通りの向こうを通りすぎていく、古めかしいセーラー服の少女——。

ミサ「（凝視）」

その少女には、顔が無かった。
ゴオオオオオオッ！

ミサ、ハッと見上げる。

鉛色の暗い空に、ミサだけに見える幻視で、巨大な眼が見開いてミサを見下ろしていた。

○湾岸／夕暮れ

力無く、歩いている萩原。
ICレコーダーに吹き込んでいる。

萩原「——賀茂康生はずっとあのビルの中にいた。俺を観察していたんだ……」

萩原、吹き込むのを止め、見回す。
チリーン——。

萩原「——」
見回すが、その鐘の音をさす主の姿は見えない。

チリーン——、チリーン——
鐘は徐々に数を増していく。
萩原を追い詰める様に——。

萩原、背後に怯えながら、走り出そうとして前を向いた途端——_二

萩原「_二」
いつの間にか、あの秘書の女が萩原のすぐ前に立っており、無表情に見つめていた。

萩原「あっ……ど、どうも……」
樹の萩原を見つめる眼、ほんの僅かな刹那、猫の眼の様に変化する。

ズン——。重い空気が萩原の周囲を瞬時に取り巻く。
萩原、息苦しくなりながら、歩きだす。

萩原「す、すみません。またあの、アポイントとって——」
それだけをやっとの事で言い、萩原、小走りにそこから立ち去っていく。
樹、じっとその後ろ姿を見つめている——。

○住宅街

ミサは、そこに立っていた。
ある住宅の前——。「四方田」の表札。

ミサ「——」

と、ドアが開き、買い物袋を下げた主婦が出てくる。
ミサ「——」

その家の主婦、ミサの姿に気づき——愕然。

千砂の母「千砂ちゃん……？ 千砂ちゃん、なの……？」

『違う』、と首を振ろうとするミサ。

だが、千砂の母は顔を歪めミサに向かってくる。

ミサ「(呟き)あたしは……」

必死にミサに縋り付こうと走る千砂の母親——。

ミサは、そこに立ち続ける事に堪えられなかった。

走り出すミサ。

千砂の母「(オフ)待って—— 待ってよ千砂ちゃん——」

走るミサ——。

ゴスなメイクが溶け、ミサの顔を汚していく。

○マンション廊下

岸田の部屋から出てくる博美。既に身繕いしてある。

岸田「また、会えるかな」

博美「(感情無く)気が向いたら」

博美、エレベータへ向かおうとすると、岸田の父親

・雄彦がエレベータから出てくる。

岸田父「——(二人に気づく)」

博美、会釈。

岸田「——息子をご迷惑、おかけしましたか」

博美「——(微笑)いいえ」

釈然としない岸田父——。

博美「(振り向き)ああ、岸田さん」

岸田父「——」

博美「このマンションの壁、鉛で出来てるんですね。だからす

ごく静かでもいいわ。携帯がつかないのが難点だけど」

微笑し、エレベータの扉が閉じた。

○インタヴュー画面

証言者4は、あの書類袋を持っていたOL。

O L「怖くないかと言えば――、最初はやっぱり怖かったです。でも――、あたしに見えているあの影が、亡霊だとしたら、あれに何か出来る筈がないですもの。だって、死んじゃってるんだから――」

それをインタヴュウしているのは――、博美自身。

博美「――（やや表情を強張らせる）まるで――、影が見える事が、選ばれた人間であるかのような感じを受けますね」

O L「（苦笑）そんな事言うつもりないけどお……。でも、普通の人に出来ない事が出来るっていう意味では、そんなんじゃないかなあなんて――」

博美のOLを見る眼、理性の抑制を超えて強い光を湛える。

○地下道

そこにてるてる坊主の様にぶら下がっている、スーツ姿の男。首を吊っている。それをじっと真下から見上げている少女。

○『スクープアイ』画面

博美「ここからお見せする映像は、衝撃的な内容です。お子さまや心臓が弱い方は、どうかテレビを消して下さい」

再びインタヴュウ画面。

博美「人に見えないものが見える事が、何か人を差別する程優位なものなのでしょうか」

O L「（苦しげ）あの――、ちょっとすみませんあたし……」
博美「（構わずマイクを突きつける）答えて下さい。あなたが言いたいのはそういう事なのでしょう。あなただけじゃない。人に見えないものが見えるって主張する人たちに。そうした意識が見え隠れします！」

O L「（頭を抱え）なんか、すごく頭の中が、痛い……」

